

[A年] 聖霊降臨節第20主日(2021年10月3日)**【旧約聖書日課】ヨシュア記 6章1～20節**

¹エリコは、イスラエルの人々の攻撃に備えて城門を堅く閉ざしたので、だれも出入りすることはできなかった。²そのとき、主はヨシュアに言われた。

「見よ、わたしはエリコとその王と勇士たちをあなたの手に渡す。³あなたたち兵士は皆、町の周りを回りなさい。町を一周し、それを六日間続けなさい。⁴七人の祭司は、それぞれ雄羊の角笛を携えて神の箱を先導しなさい。七日目には、町を七周し、祭司たちは角笛を吹き鳴らしなさい。⁵彼らが雄羊の角笛を長く吹き鳴らし、その音があなたたちの耳に達したら、民は皆、閨の声をあげなさい。町の城壁は崩れ落ちるから、民は、それぞれ、その場所から突入しなさい。」

⁶ヌンの子ヨシュアは、まず祭司たちを呼び集め、「契約の箱を担げ。七人は、各自雄羊の角笛を携えて主の箱を先導せよ」と命じ、⁷次に民に向かって、「進め。町の周りを回れ。武装兵は主の箱の前を行け」と命じた。⁸ヨシュアが民に命じ終わると、七人の祭司は、それぞれ雄羊の角笛を携え、それを吹き鳴らしながら主の前を行き、主の契約の箱はその後を進んだ。⁹武装兵は、角笛を吹き鳴らす祭司たちの前衛として進み、また後衛として神の箱に従った。行進中、角笛は鳴り渡っていた。¹⁰ヨシュアは、その他の民に対しては、「わたしが閨の声をあげよと命じる目までは、叫んではならない。声を聞かれないようにせよ。口から言葉を出してはならない。あなたたちは、その後で閨の声をあげるのだ」と命じた。

¹¹彼はこうして、主の箱を担いで町を回らせ、一周させた。その後、彼らは宿営に戻り、そこで夜を過ごした。

¹²翌朝、ヨシュアは早く起き、祭司たちは主の箱を担ぎ、¹³七人の祭司はそれぞれ雄羊の角笛を携え、それを吹き鳴らしながら主の箱の前を進んだ。武装兵は、更にその前衛として進み、また後衛として主の箱に従った。行進中、角笛は鳴り渡っていた。¹⁴彼らは二日目も、町を一度回って宿営に戻った。同じことを、彼らは六日間繰り返したが、¹⁵七日目は朝早く、夜明けとともに起き、同じようにして町を七度回った。町を七度回ったのはこの日だけであった。¹⁶七度目に、祭司が角笛を吹き鳴らすと、ヨシュアは民に命じた。

「閨の声をあげよ。主はあなたたちにこの町を与えられた。¹⁷町とそこにあるものは、ことごとく滅ぼし尽くして主にささげよ。ただし、遊女ラハブおよび彼女と一緒に家の中にいる者は皆、生かしておきなさい。我々が遣わした使いをかくまってくれたからである。¹⁸あなたたちはただ滅ぼし尽くすべきものを欲しがらないように気をつけ、滅ぼし尽くすべきものの一部でもかす取ってイスラエルの宿営全体を滅ぼすような不幸を招かないようにせよ。¹⁹金、銀、銅器、鉄器はすべて主にささげる聖なるものであるから、主の宝物倉に納めよ。」

²⁰角笛が鳴り渡ると、民は閨の声をあげた。民が角笛の音を聞いて、一斉に閨の声をあげると、城壁が崩れ落ち、民はそれぞれ、その場から町に突入し、この町を占領した。

【使徒書日課】ヘブライ人への手紙11章17～22、29～31節

¹⁷信仰によって、アブラハムは、試練を受けたとき、イサクを献げました。つまり、約束を受けていた者が、独り子を献げようとしたのです。¹⁸この独り子については、「イサクから生まれる者が、あなたの子孫と呼ばれ

る」と言われていました。¹⁹アブラハムは、神が人を死者の中から生き返らせることもおできになると信じたのです。それで彼は、イサクを返してもらいましたが、それは死者の中から返してもらったも同然です。²⁰信仰によって、イサクは、将来のことについても、ヤコブとエサウのために祝福を祈りました。²¹信仰によって、ヤコブは死に臨んで、ヨセフの息子たちの一人一人のために祝福を祈り、杖の先に寄りかかって神を礼拝しました。²²信仰によって、ヨセフは臨終のとき、イスラエルの子らの脱出について語り、自分の遺骨について指示を与えました。

²⁹信仰によって、人々はまるで陸地を通るように紅海を渡りました。同じように渡ろうとしたエジプト人たちは、おぼれて死にました。³⁰信仰によって、エリコの城壁は、人々が周りを七日間回った後、崩れ落ちました。³¹信仰によって、娼婦ラハブは、様子を窺りに来た者たちを穏やかに迎え入れたために、不従順な者たちと一緒に殺されなくて済みました。

【福音書日課】マタイによる福音書 21章18～32節

¹⁸朝早く、都に帰る途中、イエスは空腹を覚えられた。¹⁹道端にいちじくの木があるのを見て、近寄られたが、葉のほかは何もなかった。そこで、「今から後いつまでも、お前には実がならないように」と言われると、いちじくの木はたちまち枯れてしまった。²⁰弟子たちはこれを見て驚き、「なぜ、たちまち枯れてしまったのですか」と言った。²¹イエスはお答えになった。「はっきり言っておく。あなたがたも信仰を持ち、疑わないならば、いちじくの木に起こったようなことができるばかりでなく、この山に向かい、『立ち上がって、海に飛び込め』と言っても、そのとおりになる。²²信じて祈るならば、求めるものは何でも得られる。」

²³イエスが神殿の境内に入って教えておられると、祭司長や民の長老たちが近寄って来て言った。「何の権威でこのようなことをしているのか。だれがその権威を身えたのか。」²⁴イエスはお答えになった。「では、わたしも一つ尋ねる。それに答えるなら、わたしも、何の権威でこのようなことをするのか、あなたたちに言おう。

²⁵ヨハネの洗礼はどこからのものだったか。天からのものか、それとも、人からのものか。」彼らは論じ合った。「『天からのものだ』と言えば、『では、なぜヨハネを信じなかったのか』と我々に言うだろう。²⁶『人からのものだ』と言えば、群衆が怖い。皆がヨハネを預言者と思っているから。』²⁷そこで、彼らはイエスに、「分からない」と答えた。すると、イエスも言われた。「それなら、何の権威でこのようなことをするのか、わたしも言うまい。」

²⁸「ところで、あなたたちはどう思うか。ある人に息子が二人いたが、彼は兄のところへ行き、『子よ、今日、ぶどう園へ行って働きなさい』』と言った。²⁹兄は『いやです』と答えたが、後で考え直して出かけた。³⁰弟のところへも行って、同じことを言うと言った。弟は『お父さん、承知しました』と答えたが、出かきなかった。³¹この二人のうち、どちらが父親の望みどおりにしたか。』彼らが「兄の方です』』と言うと、イエスは言われた。「はっきり言っておく。徴税人や娼婦たちの方が、あなたたちより先に神の国に入るだろう。³²なぜなら、ヨハネが来て義の道を示したのに、あなたたちは彼を信ぜず、徴税人や娼婦たちは信じたからだ。あなたたちはそれを見て、後で考え直して彼を信じようとしなかった。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

ヨシュア記 6章1～20節

1 エリコはイスラエルの人々を前にして城門を堅く閉ざし、誰も出入りする者がいなかった。2 主はヨシュアに言われた。「見ていなさい。私はエリコとその王、力ある勇士たちをあなたの手に渡す。3 戦士たちよ、あなたがたは皆、町を一周しなさい。町を一巡りすること、これを六日間行いなさい。4 七人の祭司たちは、七本の雄羊の角笛を持ち、箱の前を進みなさい。七日目には町を七周し、祭司たちは角笛を吹き鳴らしなさい。5 祭司たちが雄羊の角笛を吹き鳴らし、その音を聞いたとき、兵は皆、関の声を上げなさい。すると町の城壁は崩れ落ち、兵は各自の持ち場から突入することができる。」

6 ソンの子ヨシュアは祭司たちを呼び、「あなたがたは契約の箱を担ぎなさい。七人の祭司たちは七本の雄羊の角笛を持ち、主の箱の前を進みなさい」と命じた。7 また兵に向かって、「進め、あの町を一巡りせよ。武装した者は主の箱の前を進め」と告げた。8 ヨシュアが兵に告げると、七人の祭司たちは七本の雄羊の角笛を持ち、主の前を進み、角笛を吹き鳴らした。主の契約の箱はその後を進んだ。9 武装した者たちは、角笛を吹き鳴らす祭司たちの前を進み、しんがりりが箱の後ろを進んだ。兵はひたすら歩き、角笛が吹き鳴らされていた。10 だが、ヨシュアは兵にこう命じていた。「関の声を上げてはならない。声を聞かれてもならない。口から言葉を発してはならない。私が関の声を上げよと命じたその時、あなたがたは関の声を上げるのだ。」11 彼はこうして、主の箱を担いで町を回らせ、一周させた後、陣営に戻って夜を過ごした。

12 翌朝、ヨシュアは早く起き、祭司たちは主の箱を担いだ。13 七人の祭司たちは七本の雄羊の角笛を持ち、主の箱の前を進みながら角笛を吹き鳴らした。武装した者たちがその前を進み、しんがりりが主の箱の後ろを進んだ。兵はひたすら歩き、角笛が吹き鳴らされていた。14 こうして二日目も町を一周し、陣営に戻った。彼らは六日間これを繰り返した。

15 七日目には朝早く、夜明けとともに起き、定めに従って町を七周した。この日だけ町を七周したのである。16 そして七日目、祭司たちが角笛を吹き鳴らしたとき、ヨシュアは兵に言った。「関の声を上げよ。主はあなたがたにこの町を与えられた。17 この町とその中にあるすべてのものを滅ぼし尽くし、主への献げ物とせよ。ただし、遊女ラハブと彼女の家にいるすべての者は生かしておきなさい。彼女は私たちが遣わした使者をかくまってくれたからである。18 くれぐれも言うておくが、滅ぼし尽くすべき献げ物に手を出してはならない。あなたがたが滅ぼし尽くしたはずの献げ物に手を出さず、イスラエルの宿営もまた滅ぼし尽くされるものとなり、災いをもたらされるだろう。19 ただし、銀と金、そして青銅と鉄の器はすべて主への聖なる献げ物であるから、主の宝物倉に納めよ。」20 兵は関の声を上げ、祭司たちは角笛を吹き鳴らした。兵は角笛の音を聞き、関の声を上げた。すると城壁は崩れ落ち、兵は各自の持ち場から町に突入し、町を占領した。

へブライ人への手紙 11章17～22、29～31節

17 信仰によって、アブラハムは、試練を受けたとき、イサクを献げました。つまり、約束を受けていた者が、

独り子を献げようとしたのです。18 神はアブラハムに、「イサクから出る者が、あなたの子孫と呼ばれる」と言われました。19 アブラハムは、神が人を死者の中から生復活させることもおできになると信じたのです。それで彼は、イサクを返してもらいました。これは復活を象徴しています。20 信仰によって、イサクは、未来のことについても、ヤコブとエサウを祝福しました。21 信仰によって、ヤコブは死に臨んで、ヨセフの息子たちを一人一人祝福し、杖の頭に寄りかかって礼拝しました。22 信仰によって、ヨセフは臨終のとき、イスラエルの子らの出て行くことを思い、自分の骨について指図しました。

29 信仰によって、人々は乾いた陸地を通るように紅海を渡りました。同じことを試みたエジプト人たちは、海に呑み込まれてしまいました。30 信仰によって、エリコの城壁は、人々が周りを七日間回ると、崩れ落ちました。31 信仰によって、遊女ラハブは、偵察に来た者たちを穏やかに迎え入れたので、不従順な者たちと一緒に滅びることはありませんでした。

マタイによる福音書 21章18～32節

18 朝早く、都に帰る途中、イエスは空腹を覚えられた。19 道端に一本のいちじくの木があるのを見て、近寄られたが、葉のほかに何もなかった。そこで、「今から後いつまでも、お前には実がならないように」と言われると、木はたちまち枯れてしまった。20 弟子たちはこれを見て驚き、「なぜ、たちまち枯れてしまったのですか」と言った。21 イエスはお答えになった。「よく言うておく。あなたがたも信仰を持ち、疑わないならば、いちじくの木に起こったようなことができるばかりでなく、この山に向かい、『動いて、海に入れ』と言っても、そのとおりになる。22 信じて祈るならば、求めるものは何でも得られる。」

23 イエスが神殿の境内に入って教えておられると、祭司長たちや民の長老たちが近寄って来て言った。「何の権威でこのようなことをするのか。誰がその権威を与えたのか。」24 イエスはお答えになった。「私も一つ尋ねる。それに答えるなら、私も、何の権威でこのようなことをするのか、あなたがたに言う。25 ヨハネの洗礼はどこからのものだったか。天からか、それとも、人からか。」彼らは論じ合った。「『天からのものだ』と言えば、『では、なぜヨハネを信じなかったのか』と我々に言うだろう。26 『人からのものだ』と言えば、群衆が怖い。皆がヨハネを預言者と思っているから。」27 そこで、彼らはイエスに、「分からない」と答えた。すると、イエスも言われた。「それなら、何の権威でこのようなことをするのか、私も言うまい。」

28 「ところで、あなたがたはどう思うか。ある人に息子が二人いたが、彼は兄のところへ行き、『子よ、今日、ぶどう園へ行って働きなさい』』と言った。29 兄は『いやです』と答えたが、後で考え直して出かけた。30 弟のところへも行って、同じことを言うて、弟は『はい、お父さん』と答えたが、出かけなかった。31 この二人のうち、どちらが父親の望みどおりにしたか。」彼らが「兄の方です」と言うて、イエスは言われた。「よく言うておく。徴税人や娼婦たちの方が、あなたがたより先に神の国に入る。32 なぜなら、ヨハネが来て、義の道を示したのに、あなたがたは彼を信じず、徴税人や娼婦たちは信じたからだ。あなたがたはそれを見ても、後で考え直して彼を信じようとしなかった。」

黙想のためのノート**次主日教会暦と聖書日課について**

・10月3日「聖霊降臨節第20主日」の日課主題は「信仰による生涯」。旧約日課は、「ヨシュア記」から、ヨシュアに率いられたイスラエルの民がヨルダン川を渡って最初に行った「エリコ攻略戦」の逸話の後半部分。使徒書日課は、「ヘブライ人への手紙」から、「信仰によって」生きた旧約の登場人物を次々に列挙する章の中からの抜粋。福音書日課は、「マタイによる福音書」から、「受難物語」の中に置かれた「いちじくの木を呪う逸話」とそれに続く「神殿における一連の論争」の冒頭部分。

・当日は、10月第一日曜日の「世界聖餐日 (World Communion Sunday)」と定められている。

旧約日課(ヨシュア6章より)

・「ヨシュア記」は、ヘブライ語正典「預言者」の第一巻として配される書で、続く「士師記」「サムエル記」「列王記」と共に「前の預言者」として区分される。「前の預言者」は、「モーセの出エジプト物語」を踏まえて約束の地カナンに定住したイスラエルの民が、この地で定住生活を始めてから終焉を迎えるまでの歴史を綴る「イスラエル正史」として編纂された一群の文書で、「ヨシュア記」はその第一巻として、「モーセの出エジプト物語」を描く正典「律法」の最終巻「申命記」からの接続を物語る内容となっている。「前の預言者」に含まれる一群の文書は、「申命記」によって方向づけられた神学的歴史観に沿って骨格が編集編纂されていると考えられる。それは、すなわち、正典「律法と預言者」が編集編纂されたと考えられるバビロン捕囚期以後の時代(前6~5世紀ごろ)から遡って歴史評価が為されているということであり、相対的には、後の時代よりも「古き良き時代」として描かれる傾向にある。

・「ヨシュア記」の物語を構成する「ヨシュア伝承」は、「シケムの聖所」(ヨシュア 8:30 以下、同 24 章)および「シロの礼拝所」(ヨシュア 18:1)で承継されていたと考えられる。このうち「シロの礼拝所」は、「モーセの出エジプト物語」を起源とする「臨在の幕屋」として設置され、これが「サムエル記」の「シロ神殿」に継承されるものとして位置づけられており、「モーセ伝承」と「ヨシュア伝承」を統合した伝承体として組織されていたと推認される。「シロ神殿」は、「サムエル記」および「列王記」によれば、王国時代前夜にペリシテ軍によって破壊されるが、「契約の箱」のみがその後、サムエルやダビデによって保護され、ダビデ王朝確立に当たってエルサレムに移設され、王位を継いだソロモンによって王立神殿に納められたことになっている。

・日課箇所「エリコ攻略戦」では、「ヨシュア記」の核心的伝承の中にある「契約の箱」(「主の箱」、「神の箱」)が重要な役割を果たしている。ここでは、「契約の箱」そのものに神の臨在的力が内包していると考えられている。

・17節「滅ぼし尽くし(ヘーレム)」は、特に「ヨシュア記」で繰り返し用いられる表現で、伝統的には「聖絶思想」として解釈されてきた。確かに、同時代のオリエント世界で占領地の住民を皆殺しにするという事例は少なかつたと考えられている。ただし、日課箇所でも示唆されているように、この語は、「殺す」という意味よりは、「献げ物とする」という意味で解されるべき語で、実際、「レビ記」では「献げ物とする」の意味で用いられている(レビ 21:18、同 27:21,28,29 など)。日課箇所の後段は、神に「滅ぼし尽くす」ことを命じられたとき、占領地の人や財産を戦利品として獲得することが禁じられ、すべてを「神のもの」とすることが求められていることを警句として教える逸話として続いており、単純な「聖絶思想」で解釈するべきではない。同様の思想に基づく逸話は、「サムエル記上」15章のサウル王によるアマレク戦記でも描かれている。

使徒書日課(ヘブライ11章より)

・「ヘブライ人への手紙」は、新約正典中「パウロ書簡集」に続く位置に配された文書で、書簡形式で作成された完結した説教文書である。書簡としての形式は末尾に残されているが、冒頭部分が失われており、差出人や宛先は不明である。古代教会では「パウロ書簡」と共に伝承されたが、正典文書として最終的に確定したのは4世紀末で、これらの経緯から、「パウロ書簡」には含まないが、それに続く位置に配されてきた。本書は、古代教会教父以来、新約正典中でも特に傑出したギリシア語表現が駆使されているとみなされてきたのみならず、新約正典中で(旧約)聖書に論拠を持つ「贖罪論」を神学的に展開し得ている唯一の文書とも考えられてきた。おそらく著者は旧約正典に精通していたと考えられるが、日課箇所でも取り上げられる旧約物語の人物理解は、必ずしも聖書の叙述に即しておらず、当時のユダヤ教で流布していた人物像に基づいて評価を与えていると見られる例もある。

・日課箇所は、「信仰によって生きた人々」の事例を旧約の物語から列挙している章の一部である。いずれの例も、「信仰によって」通常であれば希望も期待も持てないような極限状態を乗り越えた人物として取り上げられている。ある種の典型的な「信仰至上主義」あるいは「勝利主義信仰」の傾向が見られるが、当時のユダヤ社会の中では、「旧約続編」の「マカバイ記」などに見られるように、広く一般化した信仰観であったと推察される。主イエスや初期教会の使徒たちの信仰観は、必ずしもそのようなものではなかつたと考えられ、このことも本書が正典として受容されるのが遅れた理由である。しかし、日課箇所の先で、これらの「信仰によって生きた人々の物語」を総括して、「この人たちはすべて、その信仰のゆえに神に認められながらも、約束されたものを手に入れませんでした(11:39)」としており、単純な「信仰至上主義・勝利主義信仰」に立つのではないことも示されている。

福音書日課(マタイ 21 章より)

・日課箇所は、「受難物語」の中に置かれた、「いちじくの木」の逸話と「神殿における論争集」の冒頭である。「マルコ福音書」が伝える「受難物語」の並行記事の枠組みを基本的に共有しながら、「マタイ福音書」は独自の改変等を加えている。日課箇所の第三段落(21:28~32)も「マタイ福音書」独自のものである。

・「いちじくの木」の逸話(18~22 節)は、「マルコ福音書」が「神殿から商人を追い出した出来事」を挟む形で二場面に分けて物語っているのに対して、「マタイ福音書」は、後にまとめて一場面としている。おそらく、「マルコ福音書」がこの逸話を「神殿から商人を追い出した出来事」の解釈を示唆する逸話として理解し位置づけようとしたのに対して、「マタイ福音書」は、後段の「神殿における論争集」に向けた伏線として理解し位置づけようとしたのだろう。

・「神殿における論争集」の冒頭に置かれた「権威についての問答」は、神殿管理者である祭司長や長老たちが「神殿から商人を追い出した出来事」の責任を追及するために為されたことであろう。「権威・権能(エクスターシア)」は、主イエスを理解する上で重要な鍵となる事柄として取り上げられてきた(7:29、8:9、9:6,8、10:1)。主イエスの「権威」は、罪を赦し、悪霊を追い出す「権能」として描かれており、「天(神)からのもの」であることが前提とされている。日課箇所では、事実上、その「権威」を洗礼者ヨハネにも当てはまるものとしている。「マタイ福音書」では、主イエスを洗礼者ヨハネの宣教をそのまま継承した者として位置づけている(3:2と4:17を比較)。他方、この逸話は祭司長らの内輪話が描かれるものとなっており、彼らの内情を知っていて後に信者として弟子集団に加わった者が伝えたものであるかもしれない。

・続く「二人の息子のたとえ」は、「マタイ福音書」だけが伝える独自の伝承。写本によっては「兄」と「弟」の行動が逆転しているものがある。「徴税人や娼婦たち」の信仰回帰は、主イエスの宣教によって強力に押し進められたものと一般にはみなされるもので、それが洗礼者ヨハネの教えによって起こっていたかは不明。前段の「権威論争」でヨハネを取り上げたことを受けて、ここでも「ヨハネの権威」に帰しているのであろう。

来週の誕生日 (10月3日~9日)**主日礼拝の讃美歌から**

・21-18 番「心を高くあげよ！」(= II 1)は、コロサイ 3:1~4 に基づく伝統的な聖餐祈禱冒頭の「スルスム・コルダ SURSUM CORDA」(「心を高く上げなさい」との呼びかけに対して、「わたしたちは心を高く上げます」と応答)に基づく讃美。作詞者バトラーは 19 世紀英国教会の司祭で、自分が校長として勤める学校の讃美歌集のために作詞。作曲者スマスは 20 世紀米国聖公会の司祭。

・21-486 番「飢えている人と」は、1977 年、ドイツの牧師 F.K.バルトの作詞、カトリックの音楽家 P.ヤンセンの作曲で創作された讃美歌。
・21-563 番「ここに私はいます」は、讃美歌創作運動の第一人者ブライアン・レンの作詞。スコットランドの社会福祉施設の委嘱によりクリスマス礼拝のために作詞。作曲のダニエル・C・デーモンは米国メソジスト派牧師で、ジャズ・ピアニストとしても活動中。

21-18「心を高くあげよ！」**Lift Up Your Hearts! We Lift them, Lord, to Thee**

1. 'Lift up your hearts!' We lift them, Lord, to thee; / here at thy feet none other may we see: / 'lift up your hearts!' E'en so, with one accord, / we lift them up, we lift them to the Lord.
2. Above the level of the former years, / the mire of sin, the slough of guilty fears, / the mist of doubt, the blight of love's decay, / O Lord of light, lift all our hearts to-day.
3. Above the swamps of subterfuge and shame, / the deeds, the thoughts, that honour may not name, / the halting tongue that dares not tell the whole, / O Lord of truth, lift every Christian soul.
4. Lift every gift that thou thyself hast given: / low lies the best till lifted up to heaven; / low lie the bounding heart, the teeming brain, / till, sent from God, they mount to God again.
5. Then, as the trumpet-call in after years, / 'Lift up your hearts!' rings pealing in our ears, / still shall those hearts respond with full accord, / 'We lift them up, we lift them to the Lord!'

21-486「飢えている人と」**Brich mit den Hungrigen dein Brot**

1. Brich mit den Hungrigen dein Brot, / sprich mit den Sprachlosen ein Wort, / sing mit den Traurigen ein Lied, / teil mit den Einsamen dein Haus.
2. Such mit den Fertigen ein Ziel, / brich mit den Hungrigen dein Brot, / sprich mit den Sprachlosen ein Wort, / sing mit den Traurigen ein Lied.
3. Teil mit den Einsamen dein Haus, / such mit den Fertigen ein Ziel, / brich mit den Hungrigen dein Brot, / sprich mit den Sprachlosen ein Wort.
4. Sing mit den Traurigen ein Lied, / teil mit den Einsamen dein Haus, / such mit den Fertigen ein Ziel, / brich mit den Hungrigen dein Brot.
5. Sprich mit den Sprachlosen ein Wort, / sing mit den Traurigen ein Lied, / teil mit den Einsamen dein Haus, / such mit den Fertigen ein Ziel.

21-563「ここに私はいます」**Here Am I**

1. Here am I, / where underneath the bridges / of our winter cities / homeless people sleep. / Here am I, / where in decaying houses / little children shiver, / crying at the cold. / Where are you?
2. Here am I, / with people in the line-up, / anxious for a handout, / aching for a job. / Here am I, / where pensioners and strikers / sing and march together, / wanting something new. / Where are you?
3. Here am I, / where two or three are gathered, / ready to be altered, / sharing wine and bread. / Here am I, / where those who hear the preaching / change their way of living, / find the way to life. / Where are you?